

資料提供
日時 令和元年9月24日
所属 県立広島大学庄原キャンパス
担当 生命環境学科 生命科学科
教授 荻田 信二郎
電話 0824-74-1772

放置竹林問題の有力な解決策としての「農薬を利用した新手法の実証」

広島県・安芸高田市における実証展示試験開始について

1. 概要

放置竹林の対策については、現状、地上部である竹稈（ちくかん）の伐採（以後、通常伐採）が主であるが、地下茎により更新する竹の生長特性から、限定的な効果にとどまっている。

竹は、牡蠣いかだ、竹細工（筆の柄や和笛）、竹炭（竹炭ろ過焼酎、米栽培）など用途も多く、放置竹林の防除は竹林整備との両立を図るべき課題でもある。

本課題の解決に向け、企業と他大学の先行研究成果を引き継ぎ、研究グループとして県立広島大学が中心となり、（公財）安芸高田市地域振興事業団及び住化エンバイロメンタルサイエンス株式会社が協力して、放置竹林の地下茎を農薬で処理する**新手法による全国初の実証展示試験を次のとおり実施するものである。**この実証展示実験により、本県から放置竹林問題の有力な解決策を広く発信する。

日時：令和元年10月1日（火）9：00－12：00（別紙参照）

＊悪天候の場合は10月2日（水）に順延

場所：広島県安芸高田市美土里町横田川撫地区（別紙参照）

高田インターから5分（中国自動車道上り線、美土里BS駐車場より送迎）

2. 農薬使用の懸念点とその解決について

（1）従来法の問題点

- ① 今回使用するのはクロレートSという竹適用登録取得後12年経過の農薬である。全面土壌散布すれば竹林を枯らすことはできるが、密生する放置竹林への散布は実際に難しい上、周辺の生態系への影響が懸念されたが、その研究進展はなかった。
- ② グリホサート系農薬による竹稈注入法という手法では、農薬の外部暴露が少ないという安心感があるものの、作業が膨大で広域駆除には向いていない。
- ③ 竹の強靱な生命力の源は地下茎であり、通常伐採のみでは竹林が大規模に再生してしまう。また、重機による地下茎の全面掘り起こしではコストがかかるとともに周辺植生へ重大な環境負荷を与える。

（2）新手法の概要

- ① 新手法として、まず竹林の通常伐採（全伐）を行い、続いてクロレートSを全面土壌散布し、その後、小規模の再生竹があれば通常伐採するなど草・林地管理作業を行う。
- ② 新手法によれば、薬剤の地下部に絞った集中作用により竹の地下茎を短期間に且つ広範囲に処理することができ、地下茎を枯らすことで、その再生能力を強力かつ確実に抑制できる。
- ③ これらにより、生態系の回復可能性が早期に高められる研究が進展している。

3. 今後の展開

実証展示試験の経過を追い、新手法の有効性を示すことで放置竹林防除に寄与する。